

# 小学校体育授業における準備運動の現状と教師の意識に関する研究

川井 祐実 (宇都宮大学)

## 1. 目的

本研究では、今年度体育を研究教科としている教師を対象に、小学校の体育授業における準備運動の実態を調査し、教師の意識を明らかにするとともに、先行研究との比較から今後取り組むべき授業改善の視点を検討することを目的とした。

## 2. 研究方法

### 1) 対象者

体育を中心教科にしている小学校教師 128 名

### 2) 調査方法

令和 2 年 10 月から 11 月に、T 県内の小学校 101 校に対し紙面による無記名自記式の質問紙調査を郵送法により実施した (回収率 86%)。

### 3) 分析方法

準備運動の内容や時間に対する回答は、割合や度数を算出した。準備運動の実態や意識に関する各項目の選択肢は、一元配置分散分析からの多重比較を行った。自由記述の質問に対する回答は、複数名での協議により各記述内容を要約し、小カテゴリー、大カテゴリーを作成した。

## 3. 結果および考察

準備運動の学習形態に関して、先行研究と比較すると、「教師一斉」の実施頻度が低い傾向にあり、「児童一斉」が高い傾向を示した。このことから、準備運動は体育係や代表の児童が前に立ち実施している状況が推察される。また、教職経験年数別では「グループごと」や「個別」の 2 項目において、中堅期の教師の方が初任期の教師よりも実施頻度が高いということが明らかとなった。初任期の教師は児童中心で個別に行わせるよりも児童に決まった型の準備運動を行わせ、教師主導に授業を進めていく傾向が強いことが推察される。

意識している効果に対する回答結果では、「体温や心拍数の上昇」や「怪我の予防」といった身体的な面を意識している傾向が高く、反対に仲間意識の向上やモチベーションといった心理的な面は意識する傾向が低かった。このことから、心理的な面は身体

的な面と比べると意識されにくいことが推察される。

工夫意欲に対する回答結果から、教職経験年数の全段階において多くの教師に工夫意欲があることが明らかとなった (表 1)。その中でも初任期の教師の方がベテラン期の教師よりも工夫意欲が高いという結果が示された。

準備運動を実施している理由に対する自由記述の分析から、大カテゴリーとして「指導環境や教師自身の経験」「学習成果の向上」「安全の確保」「マネジメント」「授業構成」の 5 つが作成された。この中で「指導環境や教師自身の経験」が最も記述数が多かった。多くの教師は準備運動を工夫したい意欲が高いものの、実際には慣例という理由で実施しており、準備運動を工夫したくても取り入れることのできない状況が推察される。

表 1 工夫に対する意識と意欲の分析結果

	全体 n=125	①初任期 n=47	②中堅期 n=49	③ベテラン期 n=28	一元配置 分散分析	多重比較
		① n=47	② n=49	③ n=28		
		② n=45	② n=48			
					F 値	
①工夫して実践している	2.46±0.67	2.34±0.56	2.49±0.74	2.61±0.69	1.50	
②もっと工夫したいと考えている	3.19±0.69	3.40±0.50	3.13±0.82	2.96±0.64	4.02*	*①>③
平均値 ± 標準偏差						*: p<0.05
欠損値 ① (n=1) ② (n=4)						

## 4. 結論

- 本研究の結果より、以下の 4 つが明らかとなった。
- ①準備運動は指導環境や教師自身の経験といった慣例で行われる傾向が強い。
  - ②体育を中心教科としている教師は準備運動を工夫している意識が高く、初任期の教師はベテラン期の教師よりも工夫意欲がある。
  - ③心理的な効果よりも身体的な効果を意識する傾向がある。
  - ④安全の確保は外すことのできない要素であり、工夫しにくい運動領域も存在する。

また、準備運動をより充実させるため、安全面の要素を含み、かつ領域ごとの運動内容を提供することができれば、多くの教師がそれぞれの目的に応じた運動を取り入れることができると考えられる。